

ハイデガーのナチス加担
——その学問論的背景——

轟 孝夫（防衛大学校）

本発表ではハイデガーのナチス加担を同時代の学問論的議論との関係において捉え直すことを試みる。ハイデガーのナチス加担と呼ばれる出来事は、実質的には彼のフライブルク大学学長就任という形を取っている。これはナチズムへの単純な追随ではなく、自身の1920年代以降の学問論的な思索に基づいて大学を変革しようとする試みだった。彼の学問論的な立場は、1920年代後半になると、領域的な実証的学問を超える「存在者全体」についての学（メタ存在論／形而上学）として確立された。こうした彼の哲学は、ヴェーバーが『職業としての学問』で手厳しく批判していたような反主知主義的傾向をもつ学生たちに熱狂的に受け入れられた。この学生たちはナチス政権獲得後、大学における「強制的同質化」の主要な担い手となった。過激な反ユダヤ主義に走るこうした学生たちを宥めることを周囲がハイデガーに期待し、また彼自身もおのれの哲学による学生の指導を可能だと信じたことが、彼の学長職受託の背景にあった。